

国勢調査のオーダーメイド集計に基づく職業データの利用

——性・年齢・学歴に基づく職業間距離の多次元構造の析出——

○奈良女子大学 林 拓也
首都大学東京 齊藤裕哉
首都大学東京 中尾啓子

1 目的

国勢調査は、継時的に実施されている全数調査であり、さまざまな属性に関する人口分布を提供する基礎的な公的統計として高い利用価値が認められてきた。それに加えて近年では、その調査データに基づく「オーダーメイド集計」を作成・提供する制度が整備され、研究者が関心をもつ集計表を、所定の手続きを経て入手できるようになった。

本報告で着目するのは、職業小分類に関するデータである。数百人から数千人規模の標本調査から得られるデータに基づいて、細分化した職業区分を用いた分析を行うためには、複数のデータを合併しなければケース数を確保することが難しい。一方、国勢調査における職業小分類の情報は、そのデータのうち約1割（平成22年調査では9.8%）の人々を標本とした「抽出詳細集計」から得られる数百万人規模の就業者データなので、200を超える小分類の各カテゴリーにおいても一定のケース数を確保しやすい。

本報告での分析目的は、職業による属性（性・年齢・学歴）の異同に焦点を当てつつ、それら属性を基準とする職業間の距離構造を多次元空間上に表すことである。職業を連続変数（たとえば職業威信）としてではなくカテゴリーとして扱い、安定した分析結果を得るためには、大規模なデータが必要となるだろう。そこで、この分析にあたり、職業小分類ごとの属性構成の集計表を得るために、独立行政法人統計センターによる「オーダーメイド集計」サービスを利用した。

2 方法

使用するデータは、上記「オーダーメイド集計」サービスを利用して得た、職業小分類×性・年齢・学歴の集計表である。また、時代変化を見るために、2010年から遡って1980年までの4時点分のデータを利用する。国勢調査に用いられる職業分類は年次によって変更がなされているので、必要最小限の統合を行い、4時点共通の157区分とする。よって、職業157区分×属性32区分×4時点の集計表に基づく分析を行う。その際には、各カテゴリーを次元空間上の位置関係として表す対応分析を、各時点ごとに適用する。それにより得られた職業の布置が、属性の異同による職業間距離を表すこととなる。

3 結果

対応分析における固有値・寄与率から、4時点とも2次元解が適当であると判断された。属性変数の布置から、2次元空間は学歴と性別による分化であると解釈されるとともに、近年では性別による分化の重要性が高まっている。そして、職業の布置として表れる距離構造は、既存の職業分類あるいは地位尺度（威信）による分化だけでは説明できず、いったん細分化された区分からの再構成が必要となる。当日の報告では、上記の分析の詳細に加え、このような集計データの二次利用の可能性についても検討を深めていく。

〔付記〕本研究はJSPS 科研費 15K03818 の助成を受けたものです。